

づけをするよりも、著者の好みであると正直に開き直ったほうがよいと思う。もし多少なりとも意味のある限定理由を考えるとすれば、主として大都市圏の民鉄をとりあげていることが重要であろう。

次に、史料を正しく用いて厳密な記述を心がけている著者にしてはいささか不用意な一文があることを指摘したい。それは多磨霊園駅のはじめの部分(62～63頁)で、甲武鉄道建設計画にあたって、甲州街道の宿場町が鉄道通過に反対し、“明治21(1888)年1月、測量技師は大きな地形図を広げると、赤鉛筆でグイッと一直線を引いて測量を始め”とあるところである。そもそも甲州街道沿いの宿場町の鉄道反対は歴史的に証明された事件なのであろうか。いわんや、“赤鉛筆でグイッと一直線”などという後人のヨタ記事を見てきたように断定的に書くのは、まじめな学術書としては避けるべきであったらう。

ともあれ、鉄道の歴史に関心をもつ研究者にとって、本書はまず産業考古学的なアプローチの面白さやノウハウをふんだんに盛りこんだものであり。さらにその上に立って、「景観」という概念が鉄道にかかわる施設の歴史を総合的に解明してゆこうとする新しい試みを提唱するパイオニア的著作として記憶されるであろう。

(青木 栄一)

木村 礎 編著：

『村落景観の史的研究』

八木書店 1988年12月

B5判 599ページ 18,000円

かつて「地域」や「景観」といった概念は、地理学固有のものであった。「地域」が経済学や歴史学に取り入れられたように、「景観」が歴史学や建築学に導入されつつある。まさに共通の基盤の上で議論する時代に至ったように思われる。

本書は、編著者である木村 礎氏を中心とした明治大学スクールによる1978年から1987年に至る10年間に及ぶ現地調査に基づく、利根川中流域を研究対象地域とした通時的「景観復原の書」(3頁)である。村絵図や地籍図を資料とした条里地割や村落形態の復原は、まさに歴史地理学の研究手法であった。本書において、このような研究手法が忠実に行われていることは、歴史地理学の分野で村落研究がかつてほど隆盛でない今日、再評価する必要がある。さらに、いわゆる Real World の復原を基礎と

して、その上でいかなる説明を加えるのか、またどのような解釈を下すのか、といった点に歴史地理学の視角が必須とされよう。

さて、本書は次のように構成されている。

## 序章 展望

第一編 なぜ村落景観を一研究の意義と方法一

第二編 古代の地域景観

第三編 中世の村落景観

〔付論〕 中世における真壁氏の村落支配

第四編 中利根水系の治水と利水

一 利根川水系における地域景観の変貌—治水及び利水・開発の时期的特質—

二 水からみた近世の村落景観—小貝川・桜川流域を中心として—

三 利根川東流と五霞村

四 水のもたらす村落変貌と村一慶応二年、長井戸沼正面堤修復一件から—

第五編 近世の村落景観(一)—地域景観の変貌—

一 近世初期新田開発と村落景観

二 中期以降の新田開発と村落景観(1)—飯沼の場合—

三 中期以降の新田開発と村落景観(2)—小貝川中流域鳥羽谷原の場合—

四 村絵図にみる村落景観の変貌

第六編 近世の村落景観(二)—個別村落景観の変貌—

一 蛇池村—水田志向の村—

二 浦向村にみる開発の諸形態—高外地と水田開発の動向を追って—

三 百戸村—近世耕地開発の一類型—

四 山村—古新田の開発を中心—

五 鎌庭村—慶長・寛永期を中心—

六 猫島村—草切り伝承を持つ村の成立過程—

終章 さまざまな意味

以下、本書の構成に沿って内容を紹介しよう。

まず序章では、「村落を基軸として、日本社会の本質を追究」(3頁)するとして本書の目的を明言するとともに、その具体化への方法に遺物・遺跡、文書・記録、絵図・地図、現地観察という多様性をあげ、「村落」「地域」などの用語を規定している。さらに、研究対象に平野を選択した意義や研究対象地域の概観、本書の各編の要約と位置付けがなされている。なお、「地域景観」については第二編(44頁)で触れられているものの、「景観」そのものの

規定がなされていないのは、地理学における景観論との対比からしても甚だ残念である。ただ、強いていえば「村落民が作りあげたもろもろのものの複合的統一性」（12頁）あるいは「それを（注：村落）構成する個々の要素の統一像」（30頁）ということになろうか。

第一編は、本研究の立場を明言したものである。ここでは村落研究の系譜を簡潔にまとめた上で、村落の研究視角として共同体論の重要性とその基盤としての景観研究（景観論）の意義を強調している。さらに、このための手続きとして考古学・地理学・民俗学の方法を導入する必要性を説き、絵図・地図類の分析手法や巡検の方法などに関して具体的に述べている。

第二編では、考古学の研究成果を資料として各時代の遺物の組み合わせによる「複合型」による分析を試行し、古代の利根川中流域においては縄文時代から古墳時代への移行のなかで弥生時代が希薄であるとしている。この要因の一つとして、当該地域における生活舞台が台地を中心としていたことを強調する。さらに、文献資料として『常陸国風土記』『万葉集』『将門記』を用いて景観の復原を行うとともに、「下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」を取り上げ、現在の江戸川下流域も研究対象地域としている。

つまり本編では、遺物・遺跡と文献との時間的流れの連続性を、考古学と歴史学との結合を方法的に試みているのである。

第三編では、中世文書を欠く場合の地域景観の復原方法を「近世および近代の村落から、近世以降の要素を落していけば、中世村落の復原が可能になる」（82頁）として、いわゆる逆行法を提言している。また、地域の全体像を把握するために類型論の手続きを踏んでいる。具体的には、地形面の相違を指標として山麓涌水地帯（山麓型）、洪積台地涌水地帯（谷田型）、洪積台地無涌水地帯（低台地型）、沖積低地悪水地帯（自然堤防型・人工堤防型）の4つに地域を区分し、それぞれの村落を各々の地域の代表村落としている。事例村落を着実に復原した上で、村落（居住地域）の進展・拡大過程を、山麓型→谷田型→低台地型・自然堤防型→人工堤防型への移行を明らかにし、中世における台地の開発・畠地耕作を重視している。

第二編～第三編において試行されている、いわゆる逆行法や類型論などの研究手法は、従来から歴史

地理学でしばしば用いられてきた手法と酷似しているように、古代・中世の門外漢である評者には思われる。

第四編における研究方法として、第三編で試行された類型論が用いられ、利根川の治水の時期差・地域差から、上利根及び荒川水系域、中利根水系域、下利根水系域の3つに区分している。すなわち、上利根及び荒川水系域は近世前期において、中利根水系域は前期～中期に、下利根水系域は近代に至って治水が実施され、低地の開発に伴う景観の変貌も上利根及び荒川水系域から中利根水系域へ、そして近代の下利根水系域へと移行したことを明らかにしている。この上で、小貝川・桜川流域の諸村落、五霞村、長井戸沼周辺の諸村落の事例を取り上げている。これらの事例は、いずれも中利根水系の地域に位置している。その点からすれば、また本編の表題からしても、前述の地域区分は中利根水系域の地域的特質を位置付けたものとみなすことができよう。しかし、区分されたそれぞれの地域における景観の変貌に関して、上利根および荒川水系域については小貝川・桜川流域の諸村落を事例に、中利根水系域については五霞村で、そして下利根水系域に関しては長井戸沼周辺の諸村落において明らかにし、地域の進化系列の叙述を用いつつも、利根川流域における景観変貌の全体像への射程を展望しているとみるべきである。さらに本編は、前編において中世における台地開発から沖積平野への移行と関連し、中世から近代に至る村落景観の変遷のメカニズムを河川の治水と利水に求め究明しようとしたものと意義付けられる。

さて、第五編および第六編は主として近世の村落を対象としている。まず、第五編ではマクロな地域における景観変貌に関して、近世初期から開発された事例（前編の地域区分における上利根及び荒川水系域の事例ともいえる）として鬼怒川と小貝川に挟まれた低湿地帯を、近世中期に開発された事例（同じく中利根水系域の事例ともいえる）に飯沼新田と鳥羽谷原の開発をあげ、分析している。さらに、中根村や山王堂村など11か村の村落景観の変貌について、村絵図を資料として、いわば景観変遷史的分析が加えられている。また、この叙述は次の第六編への導入の役割も果たしている。

第六編は、ミクロの地域すなわち蛇池村や浦向村、百戸村など6か村の藩政村を対象とし、村落景観の

変貌を明らかにしている。そこでは村落の成立時点からその後の景観の変貌を復原しつつ、その要因として治水・利水の変化、村落内における持派開発などがあげられている。

以上、本書の内容を若干の寸評をしつつ紹介してきたが、最後に評者の感想を含め気付いたことを2～3あげておきたい。

第1は、絵図類に関する技術面についてである。本書には158点にも及ぶ図が掲載され、その内84点が村絵図や地籍図で村落景観を表示するものである。歴史学の研究書において、これほど多くの絵図類が資料として用いられていることは、歴史地理学との接点を確認する上でも高く評価されなければならない。しかし、歴史学においても、検地帳や名寄帳をそのまま記述することは、史料集でもない限りありえない。所有（保有）者ごとに、小字別に、さらに上田・下畑といった土地生産性別に集計し、加工して表示されることが多い（本書でもこの方法がみられる）。この意味でも、これらの資料としての絵図類を加工する必要があるだろう。つまり、資料の絵図類に表わされている景観を、地形図や迅速図を基図として復原する作業や、同一村落については同じスケールの図で示す工夫が、歴史学の分野でも試みられてしかるべきである。本書で強調されている地形と景観変貌との関連も、復原された景観を示す図のなかに等高線を記入することで、より一層明確となろう。

次に、地籍図を資料としつつも、それは近世期の村落景観の復原の資料とされているにすぎず、第五編における小保川村の耕地変化（334～339頁）や鳥羽谷原の明治期の開発（392～397頁）、上西郷谷の分析（442～445頁）でみられるものの、全体的には明治以降の村落研究への展望が希薄のように思われる。この点に関して、「日本村落史における連続を基軸とした変化、そして連続と変化の統一という思想」（3頁）を根底に持つ本書にあっては、少なくとも序章なり終章あるいは「あとがき」において記述しておく必要があるだろう。

最後に、古代から近世に至る村落景観の変貌のメカニズムとして河川の治水と利水を基軸にされている。しかし、個別の事例論文では触れられているものの、社会体制や経済機構の転換のメカニズムとの関連について概括的にでも触れられていたら、と思うのである。

以上、本書の内容をみれば理解できるように、本書は決して編著者が述べているような「景観復原の書」（3頁）ではなく、村落の景観復原への「方法論の書」としての性格を有するものである。本書の方法論の面での提言を、歴史地理学者と歴史学者はいかに受け止めるべきであろうか。改めて、今後の村落研究における対話の一步が始まったように思われる。

（古田 悦造）